



演者一覧

拓郎♂：三田 拓郎（ミタ タクロウ） いたって普通の高校1年

拓郎N：ナレーション

父♂：拓郎の父 その正体は・・・

爺♂：拓郎の祖父、拓郎の父と同じ仕事をしているが、年のため引退

母♀：拓郎の母

少女♀：拓郎の家のそばでいじめられていた少女。

・サブキャラクター

ガキA♂：いじめっこ

ガキB♂：いじめっこ

NC（♂♀ご自由に）：ニュースキャスター

少女：「サンタさんはいるもん！」

拓郎N： 十二月初めの、とある日のことだ。俺、三田 拓郎（ミタ タクロウ）は高校からの帰り道、近所の子供達が言い争いをしている所にでくわした。

見たところまだ小学校にも上がらないほどのガキンちよたちだ。

ガキA：「まだ信じているのかよう。こどもだなあ」

ガキB：「そうだそうだ、プレゼントは夜中に父ちゃんがおいてくんだぜ」

少女：「ちがうもん、サンタさんだもん」

拓郎N： 頬を膨らませ花柄のスカートを揺らしながら足をふみならし、全身で悪ガキたちの言葉を否定する少女を横目に俺は自宅へと足を進めた。

思えばこれが神の暗示、ってやつだったのかもしれない。

サンタの事情 作、柊 幸

拓郎 N: サンタクロースを信じていたのなんていつのことまでだっただろう、父親と祖父は年末はいつも忙しいらしく、ほとんど家にいたためしがない。

そのためか、うちではクリスマスを祝ったという記憶がまったくなかった。プレゼントだけはもらっていたが、あの少女くらいの年頃にはもうサンタは自分の父親であることを悟っていたような気がする。

少女: 「サンタはいるんだもん! わーん」

拓郎N: ついに女の子は泣き出してしまったみたいだ。

そんな泣き声を聞きながら、俺は今朝のニュースを思い出していた。

NC: 『今年もサンタが街に現れました。もうすっかり冬の風物詩です』

拓郎N: 朝のテレビではそんなことを言っていた。

この街にサンタは確かに存在する。ただし、それがあの女の子の信じる、ホントのサンタクロースと同じであるとは限らない。

このあたりでここ数年この時期になると現れる。その名も『怪盗サンタクロース』神出鬼没でどんなに警備がきつく、嚴重なカギのかかった屋敷でも簡単に忍び込み、大量のお宝を盗み出す。

仕事を働くのはいずれも悪いうわさのある社長や悪徳政治家の家ばかり。ニュースはこぞって『平成の義賊』と名を打って毎日報道を繰り返していた。

なぜ、サンタクロースなどという名前がついたかということ、出沒する時期が十二月の初めから、きっちり二十三日までだからだという。

なんでも二十四日は本業が忙しくなるらしい。逃走する姿を目撃した人によれば、服装はおなじみの全身赤と白で彩られたサンタの衣装で、背中には大きな白い袋を担いでいたという。まさに絵本に描かれるサンタクロースそのものだが、大きく違うのは袋の中身がプレゼントではなく盗んだお宝であるという点だ。嘘かほんとか空飛ぶトナカイのそりで空へと逃げて行ったとの話も聞く。そこまでいくとさすがに眉唾だ。

まあ、一介の高校生である俺にはまったくもって関係のない話だ。

拓郎：「ただいまポチ。お前はホント寒がりだなあ」

拓郎N： 犬小屋で丸くなるペットにあいさつを交わし、玄関を開けた。

SE（玄関を開ける音）

拓郎：「ただいまー」

爺「おお、卓郎お帰り」

拓郎N： 居間では、父親とじいさんがコタツに入ってテレビを見ていた。

俺が挨拶したってのに、親父は黙ってテレビを見つめたままだ。

テレビの画面には夕方のニュースが流れ、その内容は相も変わらず、怪盗サンタクロースの話題。まったく、世の中はあきれられるほどに平和みたいだ。

拓郎：「おお、さみー」

拓郎N： かぼんをほうりだし、俺もコタツにもぐって冷え切った手を温めながらテレビを見る。

今回、怪盗サンタクロースは悪徳新興宗教の教祖の家に盗みに入ったらしい。神への信仰を食い物にする悪徳宗教に、神の使いを語る泥棒。どっちもどっちだな。

父：「おい拓郎、ちょっと話がある」

拓郎N： こたつの対面にはテレビを消した真剣なまなざしの父親がいる。

急に改まってなんだろう。何か悪事がばれたのか？

父：「お前は、怪盗サンタクロースについてどう思う？」

拓郎：「どうって……。う、うん、泥棒は悪いことだと思うよ」

父：「そうか……」（がっかり）

拓郎：「な、なんだよ、義賊って言ったって、所詮泥棒だろ」

父：「拓郎。驚かないで聞いてくれ。実は、怪盗サンタクロースは…父さんとじいちゃんなんだ」

拓郎：「え、え~~~~~!!!何言ってるんだよ親父!ちょっと、じいちゃんも何か言ってくれよ」

爺：「スマンのう。これは事実なんじゃ」

拓郎N：なんで今まで息子に自分の職業を教えなかったのかと思ったら、そんな秘密があったのか。しかしまさか実の父親、しかも祖父まで二代続けて泥棒だったとは……

拓郎：「へ、へえ、そうなんだあぁ」

父：「卓郎、落ち着いて聞いてくれ。父さんたちの仕事は決して泥棒が本職ではないんだ」

拓郎：「だよね~さすがにね~、泥棒だけじゃ食べてけないもんね~……」

父：「父さんたちの本当の仕事は、本物のサンタクロースなんだ」

拓郎：「ふざけるなぁ!どこの世界に自分の父親から『私はサンタです』なんて話を聞いて、ハイそうですか。と納得する子供がいるんだよ」

爺：「すまないのう、わしがもう少し頑張ればいいんじやが、もう歳で足腰が言うことを聞かんのじや」

父：「卓郎、おまえには黙っていたが、うちの家は『三つの田んぼ』と書いて『みた』ではなく、本当は『サンタ』と読むんだ、そして代々この東京多摩地区を受け持つ本当のサンタクロースなんだよ」

爺：「いきなりなこと信じられないだろうが、これは真実なんじや。お前には犬だと教え続けていたが、実はポチもトナカイなんじやよ」

拓郎：「なっ!？」

拓郎N： 衝撃の真実だ。確かになんでうちの犬にだけ角があるのかと疑問に思っていたが、ずっと父親の「雑種だからだ」の言葉に納得させられていた。まさに目からうろこが落ちる思いだ。家族中がサンタの関係者だということは、

拓郎：「まさか、母さんもなのか？ミニスカサンタとか…」

父：「違う違う！何をいってるんだお前は！母さんだけは一般人だ。もちろん私たちの正体は知っているがな。仕事はすべてじいさんと私で行っている。だがじいさんの腰痛が悪化して、医者にも激しい運動は控えるように言われている。そこでだ、今年からおまえにもサンタクロースになってほしいんだ」

拓郎：「わ、わかったよ。百歩譲ってサンタなのは認めるよ。でもなんで泥棒なんかしてるんだよ」

父：「うむ、実は昨今の不況でサンタの資金管理団体からの支援額が年々縮小されていてな、子供たちに配るプレゼントのグレードが年々下がっているんだ。日本の子供たちはやれPS3だ、Wiiだと、希望プレゼントの金額は高騰するばかり」

爺「そこでわしらはサンタの能力を使って悪い大人からお金を奪って子供たちに分け与えることにしたんじゃ。わしらサンタは枕元にプレゼントを届けるためにどんな鍵でも自在に開けることができる能力があるんじゃよ」

父：「その力を利用して目標に侵入。空飛ぶトナカイ、ポチの引くソリで夜空に逃げる。っていう寸法だ。派手に見えるサンタの衣装も特殊なステルス迷彩が施されているからな、監視カメラの類には一切映らないぞ。まあ、人の目と記憶には強烈に残ってしまうのが難点だがな。」

爺：「何事も実践あるのみじゃて、早速だが、今日から働いてもらうぞ」

拓郎N: 俺には断る気力も残ってはいなかった。

拓郎N： その夜、俺はサンタクロースデビューを果たした。といってもクリスマスはまだ先、今日の仕事は怪盗サンタクロースのほうだ。

確かに教えられたとおり、手をかざすだけですべてのカギは簡単に開いた。大量の監視カメラが映しているのにもかかわらず、警報に引っかかることもなく仕事は順調に進んだ。

金庫の中の札束をおなじみの白い袋に投げ込む。普通なら持ち上げることもままならないような重量のはずなのに、白い袋はまるで羽根でも生えたかのように軽い。これもサンタ秘密道具の一つらしい。確かに普通の袋では何万人もの子供たちへのプレゼントを運ぶのは不可能だ。

あらかた金目の物を袋に投げ込むと窓から逃げ出し、ポチの引くソリで月の輝く夜空を飛んだ。少しの快感と多大なる罪悪感を抱えて、俺は少し大人になった。

拓郎N： それ以来俺は父親とともに毎晩、怪盗サンタクロースとしての仕事を続けた。不況といわれつつも、お金はあるところにはあるものだ。目標金額は無事に集まり、あと残すところは二十四日。本当のサンタクロースの仕事のみとなった。

拓郎N: クリスマスイブの夜、出発の直前になって父親は真剣なまなざしで俺に言った。

父：「卓郎、今日はクリスマスイブ。我々サンタの一年に一度の大仕事だ。子供たちにプレゼントを配るうえで気をつけなくてはいけないことが一つだけある」

拓郎：「な、なんだよ、いったい……」

父：「我々サンタの掟で、絶対に私たちの正体は家族以外には知られてはいけないことになっているんだ。子供たちにはとくに注意しろよ」

拓郎：「もしも見つかってしまったら？」

父：「それによって、おまえの人生が大きく変わってしまうことは確かだ。とにかく見られなければいい。ほとんどの子供は眠っている。プレゼントを置いたらさっさと帰る。それだけだ」

拓郎：「おい、親父！一体どうなるって言うんだよ。おい無視するなって！」

母：「ちょっと、拓郎。これを持って行きなさい」

拓郎：「え、お守り？ありがとう…って母さん？なんで縁結びなの？普通なら交通安全、せめて

商売繁盛じゃない？」

母：「ふふふ、だってクリスマスですもの。かわいい女の子を見つけなさい」

父：「拓郎急げ、もういくぞ！」

母：「ホラホラ、お父さんが待ってるわよ。頑張ってるね」

拓郎N: いらいらした様子で手綱をもった父親がせかす。何かを含んだ笑みを残す母親と二人の無事を祈り手を合わせるじいさんを残して空飛ぶトナカイにひかれたサンタのそりは三田家の庭を飛び立った。

拓郎N： 町はいたるところでイルミネーションが飾られ、空だけではなく下にも星空が広がっているようだ。しかしのんびり眺めてもいられない。

今晚中にうちの受け持つ何万という子供たちに間違いなくプレゼントを配らなくては行けないからだ。しかし、怪盗の仕事で静かに忍び込んだり逃げ出すのはすっかり得意になってしまった俺は手際よく仕事を片付けていった。ソリを引くポチも流星のような速さで空をかけ、あっという間に残すは家の近所だけとなった。

父：「卓郎、よく頑張ったな。もう一息だ」

拓郎：「ハアハア、もう汗だくだよ。早く眠って普通の生活に戻りたいぜ」

父：「なに、明日になればのんびりできる。父さんは山田さんちの方面に行くから、おまえはこのマンションを頼むぞ、部屋は間違えるなよ」

拓郎：「わかってるよ。さてと、さっさと片付けるか」

拓郎N： ポチのソリで駆けていく親父を見送り、マンションの屋上に一人残された俺は足元の白い袋を担ぎ、ベランダつたいに目標の部屋に侵入し、子供たちの枕もとにプレゼントを届けた。一晩中プレゼントを配ってまわれれば新人の俺でもそれなりにサンタの自覚ってやつが出てきた気がする。しかしその慢心と一日の疲労が俺の注意力を奪ったんだ。

SE(鈴の音)

拓郎：「うわっ、なんだこれ！しまった、トラップかっ！」

少女：「ん～、サンタさん？」

拓郎N： むっくりと起き上がり両手で目をこする少女がそこにいた。ピンクのパジャマに身を包んだ可愛らしい顔には見覚えがある。

この子は、この前サンタはいるんだって、うち近くで泣いていた娘だ。

やばい、さっさとプレゼントを置いて逃げなくては。

袋から取り出したプレゼントを投げすてるように渡すと、あわててその場を離れる。

少女：「ああん、待ってよサンタさん」

拓郎N： 少女の小さな手が俺の髭をつかむ。ゴムで止められただけの白い付けひげはあっけなくむしり取られてしまった。

少女：「あれ？サンタさんずいぶん若いのね」

拓郎N：「い、いや、これは……」

SE（窓を勢いよく開ける音）

父：「卓郎っ、しまった、遅かったか……。戻りが遅いから心配で来てみたら、なんということだ」

拓郎：「お、親父、おれ…どうなるんだ？」（不安いっぱい）

拓郎N： 不安そうに振り返る俺と、その足に抱きつく少女を目の当たりにして親父は衝撃的な言葉を発した。

父：「サンタの正体は家族以外には絶対に秘密だ。見られたものは…家族に迎え入れるしかない」

拓郎：「それはつまり……」

少女：「私、サンタさんのお嫁さんになれるのね！」（嬉しそうに）

母：「私の上げたお守りは効果絶大だったみたいね、うんうん。かわいいじゃない、彼女将来美人になるわよ。それにもうずいぶん仲良しみたいじゃない。かわいいお嫁さんでよかったわあ」

拓郎：「あのねえ母さん、その子はまだ五歳だよ。十以上離れてるんだ。結婚なんて……」

母：「あら、サンタの掟は絶対よ。私とパパも十二離れているけど、何の問題もないわよ。ホント親子よねえ」

父：「ご、ごほん……」

拓郎：「？」

母：「パパもね、プレゼントを届けに来た時私に見つかっちゃったのよ」（そっと耳打ちするように）

拓郎N： 二十五日クリスマス。

今年、俺が受け取ったクリスマスプレゼントは自分の運命と将来のお嫁さんだった。

駅前で飾られていた大きなツリーも早速解体が始まっている。

年に一度の盛大な祭りの終わりに、俺は一言言葉をこぼした。

拓郎：「Merry Christmas」

END